

山式部長治・横山大藏監立・成瀬内膳助吉政・今枝民部近義も之を勤めた。此の頃までは御年寄衆と御家老役と格別の相違がなかつたから、専ら年寄衆を補補したものと思はれる。延寶三年に至り、現任の者が順次死亡して常職を廢するに至つたが、其の後貞享三年十一月十三日津田玄審孟昭・横山筑後正房・奥村兵部源輝の三名が若年寄から任命せられ、元祿三年九月村井出雲親長は、人持組頭となり、御家老役を兼ねた。元祿六年に至り暫く缺職となり、八年三月廿八日前田備前貞親・前田對馬孝行が命ぜられ、後貞親一人で勤めたが寶曆二年以後暫く廢し、同四年六月廿九日本多副書政冬・前田修理知頼・成瀬内膳助當隆・玉井勘解由貞信の四名が命ぜられ、この時以後家老の勤め方が全く年寄衆と分かれた。

(二)大掾寺澤一執政第一の老職を御家老といひ、加賀藩に於けるが如く年寄中も若年寄もなかつた。

カロク 家祿 ↓キンロク 金祿。

カワヤイシ かわや石 石川郡朔形に産する石材。カワヤは河合谷の轉訛であらう。安山岩質凝灰岩で、一面帯青緑色の石基から成り、硬い。

カンイソウトウリヤクキ 官位相當略記

一帖。宇野保定著。官位令の一位から初位までの相當官職、坊官位位の相當、親王家・諸門跡・攝家・清華家等の稱號を略記して梓行したものである。

カンイリ 寒入 寒入りには小寒の入りと大寒の入りとがある。藩政の時小寒に入る日には、餅を食ひて邪氣を拂ひ、それより八日

カロ—カン

目に寒水を汲んで貯蓄する。この水は決して腐敗しないと信ぜられてゐた。

カンインジ 願因寺 石川郡神合に在つて、眞宗東派に屬する。初め羽咋郡西浦に居たが、明治三十七年今の地に移つた。

カンエイカナケイステン 寛永假名系圖傳一冊。前田利家以降三代の履歷を書いたものである。巻尾に寛永十八年霜月二十二日とある。幕府が諸侯諸家の系譜を徴した時に、漢文邦文兩通を作つたもの、一つである。

カンエイキブン 寛永紀聞 一冊。一名津田覺誓。津田二郎左衛門著。織田・豊臣家の天正以來の諸戰、及びその頃の武事に關する説話を記してある。

カンエイケイステン 寛永系圖傳 一冊。徳川幕府が諸侯諸家の系圖傳編纂を命じた時、進達したもの、寫で、巻尾に『寛永十八年十二月廿五日加賀少將光高、太田備中守殿』とある。林道春に依頼して作らしたもので、漢文を以て記されてゐる。富田景周はこれを國公正辭牒と名づけてゐる。

カンエイナントウヘン 寛永南島變 十冊。寶曆十三年堀枏庵著。肥前島原役の顛末を稗史體に記したものである。

カンエイムソウヒヤクイン 寛永夢想百韻 一巻。寛永二十年十月前田光高夫人の綱紀を生むに先だち、光高が江戸に赴かんとした途武州熊谷で『聞くより梅は千里の香哉』の句を夢中に得た。それを發句にして興行した述歌の百韻である。

カンエイロク 菅齋錄 一冊。横山氏の家士村田彌太夫著。天文七年正月から享保九年十月までの前田家の事實を編年集成し、巻末

に國老知微の次第、日光山社參、遊行上人回來等の前例が附せられてゐる。

カンエン 願齋寺 河北郡能瀬に在つて、眞宗東派に屬する。

カンエンユライシヨ 寛延由來書 前田吉徳の時寛延二年、領内寺院の由來を書き上げしめたもので、概ね眞享由來書と同じ。

カンオウジ 感應寺 金澤爲町傳燈寺の南隣に在つた。天台宗に屬し、山號を松梅山といひ、慶長十年西養寺眞運の弟子仁秀の創建に係る。當寺の天満宮は往昔金澤城大手先津田玄審の邸に鎮座したが、後作事所に移し、更にこゝに轉せしめたものである。明治元年神佛混禰禁止により、その山伏は復飾して細峰右京と稱し、四年一月神樂を卯辰祇園社に合祀した。

カンガイ 甘外 金澤の俳人。名は春久。當山派修驗乾貞寺の僧徒井の子。岡亭三代を稱し、嘉永三年一月十六日六十三歳で歿した。

ガンカイジ 願海寺 一に願會寺に作る。越中の一向一揆の將。天正二年品山義隆がその臣遊佐續光に焼殺せられた時、願海寺は直江萬兵衛・濱江下野・桂田六郎・宮崎以下多數を率ゐて能登に亂入したが、長綱連は遊撃して之を鹿島郡二宮に破り、首を斬ること一百餘級であつた。一揆の中願海寺・直江・濱江最も勇名であつて、時人之を龍虎三法師と稱した。以上は長氏家譜の記事で、眞偽は明らかでない。

カンカイソシヨウ 龍開祖生 或は僧正に作る。曹洞宗の僧。俗姓は得田氏。意通の二子。能登の人で、明峰素哲に參し、初め大忍寺に住し、土田に道興寺を起し、永光寺に移

り、奥邊に靜養寺を開いてこゝに寂した。その節開といふのは、羽咋郡節開の人であつたからであらう。

カンガク 漢學(加賀藩) (一)漢學勸興一前田利家のこの地に封せられた頃は、戰國の餘習を受けて、文學と稱する程のものは未だ起らなかつた。第二代前田利長の時に至り、慶長中明儒王伯子を聘したことは、實に北陸の士庶をして學に向かはしめる端を開いたものと見ていゝ。第三代前田利常は、寛永中小瀬道喜を京師より招き、その子光高の教授に當らしめた。而して光高も亦儒術を尊信し、孜孜として筆研に努め、同十七年松永昌三を迎へて侍讀とした。第五代前田綱紀に至つては、先考の遺志を襲いで學を好み、禮を厚くして儒を待つた。是を以て萬治三年木下順庵は京師に在つて加賀藩の祿を受け、松永昌三の子永三・平岩仙桂も亦來り仕へ、寛文五年には澤田宗堅、同六年には中泉恭祐、延寶三年に五十川剛伯、同六年に木下順信、天和に羽黒成賢、貞享元年に室直清、正徳四年に兒島景范等、何れも經學詞藻を以て君侯に侍した。中に就き木下順庵・室直清二人の類楚であつたことは言ふまでもない。直清と時を同じくして伊藤由貞があつた。松永昌三の門に出で、元祿九年來つて金澤に寄寓し、由貞の養子祐之も亦之と行を共にした。その後延享中に由美希賢、明和の末に伊藤暇・鶴田忠厚ありて、何れも加賀侯に登庸せられた學士中の傑傑を以て稱せられた。本藩の漢學が隆盛に赴いたのは、實に彼等外來の儒員が之を鼓吹した爲であつたが、寛政四年前田治脩が藩費を起した後は教學の具初めて備り、學士文